病の名は

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
病の名は

【Ｎコード】
Ｎ３３１８Ｑ

【作者名】
唐務新斗

【あらすじ】
青年医師のもとに足しげく通う少女は、ついに口を開き、真実を告げる。

小さな診療所で、若い医者と少女が二人、向かい合っていた。
まっ白い白衣をぱりっと着こなし、いかにも誠実な好青年といった風貌の医者は、カルテを見ながら、こっそりため息をつく。
ここのところこの少女は、身体の不調を訴え、この小さな診療所に通い詰めるのだが、どこをどう検査しても異常が見つからないのだ。さらに、色々と薬を処方しても効かないのだと言い張る。
今日もまた、彼女はやってきた。
まだ己の腕が未熟なのかと青年は悩んでいるのだが、その苦悩を押し隠し、
「今日はどこが具合が悪いのかな？」
と優しく問う。
ずっと沈黙を守り、うつむいていた少女は、一瞬、青年の顔を見上げ、そしてまた下を向く。そして、意を決したようにぽつりぽつりと話し出した。
「どうしようもなく胸が痛くなっちゃうんです。そして、ドキドキってものすごく鼓動が早くなって、苦しくなって、どうしようもなくなっちゃう」
次第に声はかすれ、語尾が震えていく。
そして、膝の上で二つの拳をキュッと握り締める。かくかくと小刻みに膝は震え続け、次第に震えは激しくなっていった。
ぱくぱくと酸欠の金魚のように口を開き、彼女は大きく深く息を吸い込んだ。一回、二回、三回、落ち着け、落ち着け、と彼女は己に言い聞かせる。胸の奥に押し隠した激情をここでみっともなく吐き出したりしないように、と。
「本当に、苦しくて、くる、しくて……」
じわりと彼女の眼がうるみ、すうっと一筋のしずくが頬を濡らし、彼女は唇をかんだ。泣くつもりはなかったのに、なんで思い通りに

ならないのか。
「だめ、なんです」
深々と、ため息をつき、彼女は顔をそらす。彼の顔をまっすぐに見ることなど、できない。
そして、彼は彼女を急かすようなことはしない。ただ辛抱強く、彼女の次の言葉を待つだけだ。
「とにかく、顔も赤くなって、熱が出たみたいにふらふらってなるんです」
かあっと彼女の頬が熱くなった。
「身体全体がふわふわして、変なんです……」
「どのような時にそんな症状が出るのですか？」
ついに彼は口を開いた。彼女は恐る恐る顔をあげた。優しい笑顔が、目の前にあった。彼は、頬を真っ赤に染めてうるんだ瞳の少女に対して穏やかに微笑んでいる。
この微笑を今、独占しているということを彼女は意識した。
そしてついに覚悟を決め、ぎゅうっと目をつぶり、
「……先生の、前に出ると。もう、苦しい……」
思い切って彼女は熱い思いを吐露すると、そっと瞼を開き、医師を見つめた。この甘く蕩けるピンク色の気持ちが伝わったかどうか、確かめるように。
ついに納得がいったと、彼は彼女のまっすぐな視線を力強く受け止め、うなずいた。
「なるほど、これは医者恐怖症です。ここに来れるということは、病院恐怖症ではないようですね。しばらくは自宅でゆっくり養生するといいでしょう」

（後書き）

インフルエンザにはご注意を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3318q/

病の名は

2011年1月26日00時49分発行